

(3) 討論会



金井 各グループからの発表を踏まえて、改めて、「防災教育のためのコミュニケーション力」と「地域と連携した防災教育とその継続」という二つのテーマについて、皆さんとディスカッションさせていただきます。

奈良 午前中のグループディスカッションを拝見しているの感想を述べたいと思います。三つあります。まず一つ目は、先生方はワークショップがお上手だなということです。こうやってテーマが出されたときに、たちまちご自分のものとされて当事者性をもって本当にすごい瞬発力と集中力で取り掛かるということ、たちどころにできるということは、なかなかないので素直にすごいなと思いました。

それから二つ目ですが、非常に根本的で本質的なところをキーワードとして出したりしていたときに気がつきました。『命の教育』といいます、防災教育っていうのは人間教育なんだということを、皆さんが言葉は変わるんですけど、いろんなキーワードでもってついていらっしやることに気がつきました。例えば、繰り返しますが、「防災教育は人間教育である」とか、「防災教育は人づくりである」、「逃げろ逃げろ教育ではダメだ」、「防災教育のための防災教育ではダメだ」という表現をされている方もおられました。釜石市では『いのちの教育』ということで、立派な冊子もつくってくださっているということです。もちろんうまく防災教育をするテクニックは重要なんです、大元にある如何に根本、本質を教えられる教育にするか、ということを皆さんはやっておられるんだということに気がきました。考えてみれば、例えば、ある子が3年生なら3年生で教えられるときっていうのは限られていて、でもその子っていうのはこれから社会に出てずっと生きていきますし、学校を出て家に戻ったら生活があります。ハザードはその子その子で違って、しかもマルチハザードなわけですよね。一個のテクニックで「こういうときにはこうなさいね」と教えてもダメ。先生方はよくわかってらっしゃって、その子が正答のない問題に一生懸命悩んで考えることで、今後いろんな新しいハザードに出くわしたとしても、自分で考える力をつけていく。そういうことを皆さんされているんだな。それを今日もグループディスカッションでおっしゃっていました。汎用性のある防災教育、姿勢の防災教育ですよ。それについて議論されていたということであらためて知ったということが一つです。本質について議論されていたということです。

それから三つ目に皆さん議論を聞いていて、私が「そうか」と思ったことは、皆さん防災教育をおこなうにあたってのコミュニケーションの相手というものをちゃんといろいろ考えてらっしゃるといふこともわかりました。つまり防災教育のための防災教育だったらリスクコミュニケーションの相手というのは子どもたちだけなんですよね。でも、皆さん、もちろん子どもたちを中心にコミュニケーション



奈良 由美子先生

の相手を考えていらっしゃるわけなんですけれど、いろいろ議論聞いていますと、大人もちゃんと考えてらっしゃる。同僚も考えているし、反対勢力を説得するかのような、如何にやる気のない人にもやる気を出してもらえるようにするかとか、如何にしてお金とってくるんだとか、マスコミを活用するかとかですね、大人もコミュニケーションの相手としてちゃんと想定されていて、如何にうまくそれをおこなって巻き込んでいっていかうことを考えてらっしゃるといふこともよくわかりました。そして、さらに皆さんの発表を聞いていると、子ども相手のコミュニケーションと大人を相手にするコミュニケーションって共通点が多いなと思えました。例えば、正しい知識をこちらがもっているということを示すとか、こちらにはすごく熱意があるんじゃないかということをおわかってもらうとか、あなたのために、町のために、子どもためにと思っているんだという姿勢を相手に分かってもらうとか。これって子ども相手でも大人相手でも共通です。子どもに自己効力感をもたせるというコミュニケーションは大事。でも大人にだって自己肯定感を持ってもらうことは大事です。一緒に防災教育の仲間になってもらうためには、そういうことを皆さんは実践の中で感じ取られてキーワードとしてだしていらしたなと感じました。私の方からは三つ感じたことをお伝えさせていただきました。

三つ目に申し上げたコミュニケーションの相手について、皆さんの議論というのはリスクコミュニケーション論の中で正しいとされています。リスクコミュニケーションは信頼を形成すること、信頼をもってリスクコミュニケーションをおこなうことが重要というのは定石のように言われています。このときにリスクコミュニケーションにおいて信頼を形成するときのモデルとして、信頼形成モデルというのがあります。このモデルは二つのことを相手が認識してくれた場合に相手は自分を信頼してくれるというものです。そのうちの一つが、相手が「この人は専門的な知識があるな」ということを相手が認識することです。子どもたちが「先生、正しいことをちゃんと言ってくださっているな」、「先生は先生としてキャリアもあるし、防災教育の経験もあるし、正しいことを言ってらっしゃるな」と子どもたちあるいは教育委員会の方、住民の皆さんが認識するということがまず大事です。もう一つの要素ということが姿勢の好ましさを相手が認識することです。「A先生は町のために言ってくださっているな」とか、「A先生は僕たちのために言ってくれてるな」というふうに、A先生の熱意であるとか、正直さだとか、公正であるとか、嘘をつかないとか一生懸命コミットしてくれるとかっていうことを相手が認識することによって相手は先生を信頼するようになるんです。こういった学問分野でいわれているようなモデルを先生方は見事にクリアをされていて、それに基づいて実践されているんだなということも感じました。

片田 いまの奈良先生のお話を受けて、散々話してきたこととは、別な観点から思ったことを少し述べさせていただきます。先生方が先ほどの話題の中で一つの例として、「地域コミュニティとうまくどうやったらいいのか」、「地域をどう巻き込んだらいいのか」、「なかなかコミュニティの人間関係が希薄になっていて、とりつくしまがない」ということなんですけれど、そういうことすべて共通して最近思っていることがあります。例えば、コミュニティが地域で崩壊していつている。なぜか？それは簡単に言えば、コミュニティを維持する動機づけがないからです。「面倒くさい、だから戸建てよりもマンションの方がいい」みたいな話になったり、「壁の向こうは誰々が住むぞ」ということを批判的に言われるんだけど、結構気楽でいいからそうしてしまうわけです。コミュニティがコミュニティとして維持されないのは、コミュニティを維持する動機づけがないからです。なぜないのかということなんですけれど、昨年、高知で全国都市問題会議という会議があつて、そこで話をしたのですが、昔はコミュニティを維持せざるを得なかったんです。例えば、「火事と喧嘩は江戸の花」と言われていた。あれだけ大きい町だから一、二件の火事は起こるわけです。そうすると、火が出たら一刻も早くみんなで消さない限り、みんなでやられちゃうっていう状況ですから、コミュニティもへつたくれもないですよ。火がでた」と言ったらとにかく消す。日頃からの関係が当然必要です。昔村八分という言葉がありますけれど、この八分の残り二分は何かつていうと葬式と火事です。どんなに人間関係が疎遠でも火事と葬式だけ別というわけです。江戸では火事という災害にみんなで向かい合わなければならず、その必然性がコミュニティを維持する力になっていた。「みんなのためにみんなで守る」ことがコミュニティ維持の動機づけだったわけです。いま、コミュニティが崩壊していったのはなぜかつていうと、防災が大きな整備をやり過ぎたからです。つまり、みんな役所任せになったからです。堤防をつくってもらって、危ないときには避難勧告で教えてもらって、子どもたちは学校で防災教育をしてもらって、避難所に行ったら、飯はまだかと不満を言えばでてくる。こういう状態です。そうなってくると、荒ぶる自然に対して、みんなで向かい合うというコミュニティ維持の動機づけはなくなり、コミュニティは崩壊するわけです。だから、コミュニティが崩壊していくのが問題だと言つたつてしょうがないんです。

いま僕らは、防災、防災教育というものを推進していく中で、昔のようにみんなで向かい合う必要があるんだという共通認識があります。地域の人にもこの認識をちゃんとわかつていただかない限り、コミュニティ再生はありえないと僕は思うんです。こう考えると、「なぜコミュニティが崩壊しているのか」とか「コミュニティに入ってほしいけど、入ってくれない」とか、これらは課題だつていうんだけど、解決できずにそこで止まってしまつていないですか。だから、発想を変えるべきですよ。前提としてコミュニティは崩壊しているんだと。だけど、防災というもので、「もう一回コミュニティをつくってくだ」、「みんなで思いやるような社会をつくっていくんだ」「みんなでその災害に向かい合うようなコミュニティをもう一回つくっていくんだ」というふうに、「コミュニティが崩壊しているので、それでなかなか地域に入っていくのが難しい」からの逆転の発想ですよ。防災を通じて、僕らが地域を変える」くらいに考えていった方がいいと思うんです。

こう考えていくと、いろんなことが見えてくる部分もあるんです。例えば、防災講演会に来るような人はそもそも意識の高い人で、本当は来ない人に防災をお伝えしたい。でも来ない。なぜ来ないのか。それを僕らは問題だという。市民の防災意識が低いと断じておしまいになつ

てしまうわけですね。でも、それでは何の進歩もないわけです。さっきのコミュニティが希薄化しているからと言って、そこで切ってしまったのと同じで、来ないのはなぜかって考えると来ないなりの理由があるんですよ。その人にとっては、防災は大事だとは思っています。防災も必要だとは思っています。でもその人はうちに寝たきりの婆ちゃんがいる、夕ご飯をその時間帯に食べさせてあげなきゃいけない。その人にとって、防災も大事な問題なんだけれど、もっと大事な問題があって、その人にとっての大事なことをやっている。要するに、ファーストプライオリティーに防災がなっていないだけなんです。でも僕らは防災を進めようと思っていると、来てもらいたいから「防災意識低い」とか批判的に見てしまう。いま僕らはすべきことは、如何にして防災をその人にとってのファーストプライオリティーと認識してもらうかであって、批判してもしょうがないんです。僕らは気づいているんですよ。防災をやることがどれだけ地域を変えられるか。どれだけ子どもたちの健全な育みということに対して効果的なのかと。僕らは気づいているから、声高に言おうとしている。だけど、気づいていない人たち、もしくは先生方のまわりの同僚に、防災教育の必要性を滔々と語るだけではダメなんです。「本当だ、防災教育って本当にいいよね」、「なるほど、わかった」と言って、腑に落ちたときに、その人にとってのファーストプライオリティーになったときに、初めてその行動をとってくれますよね。全部そうだと思うんです。これも一つの例なんですけれど、津波の後、逃げなかった人に「どうして逃げなかったの」と聞くと、すごく不愉快な顔をするんです。その人は逃げなきゃいけないことは百も承知だったんです。「僕は逃げないぞ」と意思決定していたわけじゃないんです。「よし、逃げよう」って意思決定ができずに、結果として、逃げていなかっただけなんです。それを僕らは、逃げていないと「なぜ逃げない」、「防災意識の低いやつだ」と批判する。そんなこと言われたら、「あんたにそんなこと言われる筋合いない」と彼だって不愉快です。コミュニケーションとして、「あなた、逃げなかったね」「どうしてそうやって防災意識低いの？」といきなりこんな言われ方したら、いっぺんにコミュニケーションエラーを起こしてしまうわけです。「本当は逃げなきゃいけないとわかっている」「ただそのときに逃げようっていう意思決定をしなかっただけ」という相手の気持ちに立って、「そうだよね。わかる。あのときに、よし、逃げようという気持ちになかなかないよね」という理解を示すことから、コミュニケーションを設計していくと、「でもそれじゃまずいよね」という中から心を動かすというところまで導いていけますよね。

ここまで議論してきたことも同様だと思うんです。例えば、「先生方が防災教育を広めるために同僚の先生にはどうするか」、「地域に広げるために地域コミュニティに対して、僕らの知っている“良かれこと”はどうお伝えしていけばいいのか」という議論すると、「同僚がやる気なくて悪い」、「コミュニティが悪い」、「親が無責任だ」などと、これまではコミュニケーションのエラーを起こしている要因を、常に相手方に求めようとしてきた。これをやっている限りは何も変わらないんです。「そうだよね」って言ってやらなきゃ、その人なりに理由があるんです。相手の視点からみるときに、何が見えてくるのかということがコミュニケーションの根本的で最も重要なことです。だから子どもたちとのコミュニケーションでも、子どもたちの側から見て、「そうだ、逃げなきゃいけない」という思いを子どもたちにどうつくってやるのかを考える。子どもたちにとって、お母さんとの関わりの中でものを語ってやることで、「逃げなきゃ」って思うのではないか。「きみの命はきみだけの命じゃなくて、お母さんはきみの

命をととても大事に思っている」、「だからきみが逃げないとお母さんだって逃げないよね」と問いかけることは、子どもたちの価値観側でものを見たときに、そういうコミュニケーションが頭に浮かんでくるわけですね。こういうまさに「社会を変えていこう」、「人を変えていこう」と問題は、全部コミュニケーションの問題なんです。そして、そうしない人にはそうしないその人なりの理由がある。そうしてる人はそうしてるなりにその人なりの理由がある。そのため常に相手の行動や思いに対して“是”と言うところからスタートしないと、コミュニケーションは必ず失敗するという認識をもっています。だから、相手との交流を得ていくためには、「そうだよね」と常に YES の連続で相手の心をスムーズに誘導していったらいいようなコミュニケーションを設計していただくということが、すごく重要だと思っています。

奈良 理論的な話ということで、もう一つ付け加えさせてください。今の片田先生の話を受けまして、また私の話の補足になるんですけど、先ほどリスクコミュニケーションと信頼形成と二つの要件のお話をしました。一つは、相手が専門性を認識してくれるということ、もう一つが姿勢の好ましさを相手が認識してくれるということです。いくら自分が専門性を持っていても、相手に伝わらないとダメです。いくら自分が熱意を持っていてもそれが相手にわかってもらわないとダメです。両方がまず相手に認識してもらって初めてうまくいく可能性がでてきます。両方を認識してもらっても、リスクコミュニケーションは失敗をよくするんです。それで、いろいろな経験の結果、もう一つ重要なことがわかっています。価値の類似性です。価値観ということです。何を大事にしているかということです。相手が「A先生は私と同じものを大事にしてくれている先生だな」と認識したときに、相手はA先生を信頼するということです。自分と相手って所詮違う人間ですから、やっぱり大事にしているものが微妙に違うこともありうる。でも、「こういうところで同じものを大事に思っているよね」というところを見つける努力、時間がかかるけれどそうするしかない。それに尽きると思います。それがたぶん地域への愛であったり、家族を大事に思う気持ちであったりとなるのではないのでしょうか。

そして価値の類似性が高いなと思うのは、リアリティを共有している人に起きやすいんです。社会現実を共有している相手に対しては「この人って自分と同じものを大事にしてくれているな」と感じやすいんです。だからやっぱり同じ地域に住んでいる人が言うと説得力があるし、同じように被災をした人が言うとやっぱり心が動くんです。同じように子どもを愛する親が言うと心が動くという具合です。

金井 話題をしぼって、話を進めたいと思います。先ほど奈良先生にもお話いただいたように、「防災教育はすごく狭い範囲で防災のことだけを教えるものじゃない」というのは、十分にご理解いただいている。では、「そういう単純に教えなきゃいけないことを淡々と教えるという教育じゃない」、「自ら判断し行動できる」、「主体性を高める」という教育を行う場合に、何が重要になるかということについて、先ほどのグループディスカッションでほぼすべての班で言っていたのが“熱意”でした。そこで、今後、防災教育と一緒にしっかりやってくれるお仲間を増やすために、ここにいる皆さんの“熱意”をどうやって伝播していけばいいのか、というのは気になりました。その方法として、皆さんは、研修会をやったり、被災地に行って話を聞いたりすることをあげていました。

広い意味での防災教育をうまくことするために、“熱意”が重要だとするならば、それはどうやったら他の人に伝えられますかね。そもそも皆さんはなんで火がついたんでしょう。例え

ば、片田先生の話を聞いて、熱がついたって方もいらっしゃるかもしれないんですけど、でもその熱意のある片田先生の話のどこにひかれて、みなさん熱を持ったのかなど。熱を持った理由がわかれば、他の人にも同じことをしていけば伝えられるのではないのでしょうか。

林 僕は片田先生のことを知る前、阪神淡路大震災が大きかったです。阪神淡路大震災が起こったときには、私は教員をしていました。ちょうど弟が神戸の大学へ行っていて、あのときは和歌山県の私の住んでいるところでもベッドがドカンというくらい揺れがありました。テレビをつけたんですけど、そんなに大きな地震だったとはわかりませんでした。学校でテレビをつけたら、神戸の町がすごいことになっているというので、弟の安否確認をしたのですが、生きているということでした。そのあと、しばらくして落ち着いてからボランティアで神戸へ行ってきました。長田町へ行ったんですけど、悲惨な現状を見る経験をしました。阪神淡路大震災以降は、必ず自分のクラスでは、地震に対しての授業、ずっと防災はやっていました。子どもたちには絶対に話をしていました。紀伊半島大水害のときにも、同級生は一家5人が流されて全員死んでます。先輩の息子、中学生の野球少年でしたけれど、その子もおじいちゃん、おばあちゃんをかばって流されて死んでいます。というような体験もあるのかもしれませんが、具体的にそれがモチベーションなのかどうかわかりません。でも、今日のグループディスカッションでもあったんですけど、学校はすごく忙しくて、僕らもいつも防災のこと考えているわけじゃないです。普段は忙しい仕事に忙殺されるんですけど、こういう場に出てきて、釜石に行かせてもらったりとか、話や実践を聞いたりっていうのはすごくモチベーションがあがります。話を聞きながら、うちでもうちよってやっておかないといけないなと思って帰ります。段々薄れてくるんですけど、定期的にこういう会に出させてもらうっていうのは熱意や自分のモチベーションを高めるためには大切だなと思います。

金井 個人的な大きな経験があるからというのも一つの理由なんだなということもはっきりわかるお話でした。稲垣先生はどうですか？

稲垣 大学時代に岡山にいたんですけど、友達が鳥取にいまして、そこで地震がありました。実家へお手伝いしに行ったんですけど、半壊しているようなところがありました。次に広島の呉の友達のところへ遊びに行った際には、呉市で揺れて、いろいろお手伝いした経験もありました。教員になったときに、地震に対して怖さっていうのがありました。しかし、3.11のときに、うちの小学校では、まわりから「津波注意報が出ている」という放送が聞こえました。どうしたもんかなとなったときに、子どもたちを集めて集団下校させました。あとあと、考えたら間違った判断をしたっていうのが自分の中で思うところがありました。思うところがあったのだけれど、教師になって数年という段階でしたので、どうしていったらいいかというのがわから



林 宣行先生



稲垣 克明先生

ないままだったんですけど、熱意のある先輩から防災の担当を引き継ぐことになって、頑張ろうかなと思いました。

金井 ここにいらっしゃる皆さんは、熱意を伝えて頂く側になんだと思います。なので、もし熱意が大事だと言うのであれば、自分の中に溜め込まないで、振りまいていただき、模範になっていただきたいなと思います。最初にこの話をしたかのは、昨日も話に出したんですけど、徳島の津田中学校にお邪魔して色々お話聞いたときに、あそこも11年間、ずっと防災教育を総合学習の時間を使ってやってるんですね。でも、よく話を聞いたら、ぼうさい甲子園の常連校の津田中学校でも、担当者二人でずっとまわしてるんです。最初に立ち上げた小西先生というベテランの先生と、もう一人は、その立ち上げのときに一緒にいた佐藤先生という中堅の先生です。この二人で始めたのですが、佐藤先生が途中で異動してしまって、その後は小西先生が一人でずっと続けていたそうです。で、10年もいるので、そろそろ異動というタイミングで、佐藤先生が戻ってきて、そのまま佐藤先生が引き継いで、今度は小西先生は異動。現在は佐藤先生が一人で続けているそうです。津田中学校を訪問して、防災の話を聞きに行ったら、二人ともすごい喜んだんですよ。なんで、こんなに喜んでいっぱい話してくれるのかなと思ったら、職員室で防災の話をする相手はいないし、ほとんどその機会もないんだそうです。こういう状況を見ると、「熱意があって、一生懸命一人で動いちゃう人」にとどまらないで、その熱意で周りを巻き込むところまで、上手いことやってもらいたいです。同僚の先生の熱意を高めるようなこともしないと、どんどん進まないんじゃないかなと、皆さんのお話を聞いて思いました。

次に、地域との連携についてお話しさせてください。先ほど連携先について、片田先生の方から町内会とか自主防とかってというのは、連携する先としては一番やりやすいけど、そこがしっかりしてない地域が増えてきているから、それを前提にやっていきましょうという話をいただきました。まさにその通りの地域が世の中にいっぱいあるんだろうなと思います。でも、そうは言っても、今学校の先生が本当に子供のことを思って、地域のことを思って、「悪いんだけど協力してくれませんか？」と言えば、無碍に断る組織ばかりじゃないと思うんですよ。私の少ない経験ですけど、少なくとも、消防と警察からは断られたことがないです。地域の活動でも、学校の取り組みでも、何かやるときに「お手伝いしてください」と言ったら、必ず地域の交番のおまわりさんが来て話をしてくれたり、警備にまわってくれたりとか、消防署の職員の方が協力してくれました。なので、どこかに必ず何かしらの連携できる素地のある所はあると思うんですね。そうなってくると、「連携が必要だ」じゃなくて、「どう連携先を上手く使うか」っていうことについて、もう一度ご意見いただきたいなと思うんですね。ここまでの議論で、防災教育を通じて、子供たちの自己肯定感を高めて、主体性を高めて、思いやり気持ちをつけて、コミュニケーション能力が高くなる、というような成果が、生徒の姿から見て取れることを認識していただいたと思うんです。であるならば、そういう子供たちの成果を上手く引き出すような、連携の上手い繋がり方どうしたらいいんだろうか。ただ行って、一緒にやってくださいじゃなくて、そこには多分企画力だったり、アイデアだったりが必要になると思うんです。せっかく連携するんなら、上手く使うための知恵というか経験を共有していけたらいいんじゃないかなと思っています。森本先生は、震災以前に釜石東中学校の先生をされていて、イーストレスキューを立ち上げています。あれはやるためにいろんな所をお願いに行って連携してたと思うんですけど、ご経験をご紹介していただけますか。

森本 先ほど、熱意を持ってというお話があったんですが、自分自身、例えば9年間釜石市にいまして、最初5年間はほとんど防災は取り組んでおりませんでした。そんな中で、熱意というか、「やっていかなきゃな」という必要感を持つようになったのは、片田先生の講演を聞いたのと、あとは釜石市の教育委員会の方針でした。そして、「やらなきゃな」と思ったときに、釜石東中学校に異動になりました。



森本 晋也先生

それで、1年目はとにかく地域に出て行って、子供たちと学んだというのが非常に大きかったなと思っています。地域との連携の部分では、自分がいろいろ企画したりして、「こんなことやってみたい」とか、先生方とも相談したのですが、そのとき一番の相談相手になってもらったのが、市の防災担当の方でした。いま振り返って、釜石の取り組みがよかったと思うのは、片田先生が入られて、自分も手引き作りとかいろいろ一緒にやるわけですが、そのときに必ず市の防災担当者の方がいて、「何かあれば、私に声をかけてください」とおっしゃってくださっていたんです。一担当者の私としては、市の防災担当職員との繋がりが核になったなと思います。例えば、それまで活動していたボランティアから防災ボランティアストで切り替えるときも、「こういう団体があります」「こういう方がいます」と紹介してくれました。そして、実際に会いに行くと、いつも別の地域学習でお世話になっている方だったりしました。そうすると、「地域はこの方々を中核に動いているんだ」というのも分かってきます。次の段階では、その方を中心をお願いしてきます。例えば、安否札の活動を大きく広げるときには、さらに核になる方が「ここここは僕が全部面倒みます」とか、フィールドワークをするときには、「この地区の学習については、この方を中心にやりましょう」とか、さらに「こういう方がいるので、ゲストティーチャーを用意はこちらでやります」とか、「こういうフィールドワークを私たちの両石町内会ではやりますよ」とか、「片岸だとどうやってやりますよ」というふうにだんだん連携が広がっていきました。それは防災だけでなく、様々な学校の取り組みに広がっていきました。ここまで学校と地域との関係が繋がっていく仕組みができると、担当者がいなくても、学校の体制と地域の関係作りが継続できていくんだろうなと思いました。片田先生も覚えてらっしゃると思うんですけど、鶴住居公民館で津波避難の家についての会議のときに、地域からいろいろご意見が出ました。学校としても、市としても、津波注意報が発表されたら避難する、という体制をつくっていたんですけど、ある地域の方が「注意報ごときでは逃げられない」と言い出し、空気が悪くなったんですね。そのときに、女性の民生委員さんが手を挙げて、「やっぱり子供たちは地域の宝だよ」と、まさにみんなが共有できる部分を指摘されて、「そのためにはやっぱり地域をあげて協力しようよ」とおっしゃって、そこからまた一気に協力する雰囲気変わったというのが印象に残っています。そのときに、「鶴住居小学校さんだって頑張ってるじゃないですか、釜石東中学校さんも頑張ってるじゃないですか。だから地域をあげて、みんなで防災を協力して取り組んでいきましょうよ。」となりました。まさに連携って、こんなふうにして進んでいくんだな、と実感しました。

片田 子どものことを大事に思わない地域はないんですよね。子どもたちがこんなに頑張ってるんだということを地域の大人が知れば、「嬉しいよね」と思う。この意識の共有は簡単に図れます。

子どもたちが頑張り、子どもたちが地域のことを思い、一生懸命やってくれている姿をですね、快く思わない人はいない。これだけは多分普遍的な事実なんだろうと思うんですね。

で、子どもたちが頑張っている姿を見せることと同時に、一方で、おじいちゃん、おばあちゃんに厳しいことを言ってるわけです。僕は釜石の高齢者大学で、「じいちゃんが津波警報を無視して、死ぬのはじいちゃんの勝手だ」、「でも、じいちゃんが逃げないから、釜石の鶴住居小学校の子どもは逃げないと言った」、「『どうして逃げないの』と聞くと、『だって、僕ん家、じいちゃん逃げないもん』と言った」、「じいちゃんは、背中で孫の命奪おうとしてるんだ」って話をしていました。考えてみてください。「じいちゃんが津波警報を無視して死ぬのは、じいちゃんの勝手だ」と、ここだけ切り取られたら、「片田はじいさんが死ぬのはじいさんの勝手だ」と言い放った」と言われるフレーズになるんですね。でも、それをじいちゃんはしみり聞いて、「うん、そうだ、これはいかん」って思ってくれた。それは、「じいちゃんの大事なものである孫を、僕も守りたいと思っている」と認識してもらえたからです。先ほどの奈良先生の話で言うならば、姿勢に対する好ましさを認識してもらえた。「僕もおじいちゃんの孫のことを大事に思ってる」、「だから、じいちゃん、その行動は駄目なんだ」と言ってる、この姿勢にじいちゃんは同意をしてくれるわけですね。

“子どもたち”というのは、地域をまとめるキーポイントになっているように思います。で、「子どもたちに協力してください」と行くのもいいんですけども、それよりも、子どもたちが地域に出張って行って、じいちゃん、おばあちゃんのことを考える。地域にお願いするんじゃなくて、学校から攻めていく。それに対して、地域のおじいちゃん、おばあちゃんは嬉しくて、「ありがたい」と言ってくれる。また、保育園の子どもたちのことを、中学生が頑張ってくれる。こういう子どもたちの頑張りが見てとれたときに、地域全体が嬉しくて、子どもたちを褒めてやりたくなる。で、家庭や地域からその気持ちが子どもたちに伝わると、子どもたちは嬉しくなって、さらに地域のことを考える、という正のループが回り始めるんですね。で、いまそれがグルグルグルグル回っているのが、小木地区だと思うんですよ。小木地区はどんどん変わっていている。全部子どもたちがポイントになっているように思いますよね。大人たちも、自分たちが中学生の頃、悪さをした覚えがあるから、「中学生なんてあんなもん」ぐらいに思っていたのが、「あの中学生たちがあんなふうに動いてくれるようになった」というのが、大人たちにとっての喜びになって、大人も動き出した。子どもを中心に地域を変えることはできると思うんですね。「協力をお願いする」という論旨でずっと話をしてきましたけど、違うと思うんですね。ちょっとしんどいんですけど、弾み車の最初は子どもたちを外に連れ出す。お願いに行ってから何か始めるよりも、こちらから出張っていった方が早いと思うんですけど、小川先生どうですか。

小川 今、片田先生がおっしゃってくれたことは、昨日、新庄地区の方もおっしゃっていましたが、生徒を出していくと、地域の方が喜んでくれる。それが子どもたちに跳ね返ってくれる。そのきっかけが、たまたま防災だった。小木中学校の場合は、防災教育をしようというよりも、避難訓練に一人でも多く参加してほしいと思っていた。その思いを廣澤先生を中心として、子どもを使って、攻めていったというよりも、仕掛けていった。その反動で、結果として、地域が動くところにまで繋がってきた。あるお寿司屋さんには、こちらから「貼ってくれ」と頼んだ覚えは一切ないのに、生徒が作ったハザードマップが正面に貼ってあるんです。それを嬉しそ

うに話してくれる。そういう光景が見られてくると、片田先生がおっしゃってくれた様に、「なんとかお願いします」ではなくて、「こんなことやってるんですけど、どうでしょう」くらいの感覚で、地域に出て行っているのが、今結果的に好転している大きな要因かなと思います。

廣澤

小木地区の最初のスタートは、あちらには熱い人が無理やり私を引っ張ったというのが一番なんです。その後、子どもたちが、「小木地区から津波の犠牲者を出さないためには、避難訓練をするのがいい」、「なるべくたくさんの人を避難訓練に参加させたい」と言い出しました。「じゃあ、どうしていけばいいか」ということで、1年目やりました。参加者は少ないです。「じゃあ、どうしていきますか」と子どもたちが考えたときに、街の中を見ると、お年寄りの人たちと保育園の人たちばかり。ちっちゃい街ですから、大人の人たち、高校生は他の地域に働きに行っています。お昼に外を見てみると、お年寄りが、寂しそうな感じでグランドゴルフをしています。そこで、そこに中学生が「グランドゴルフ一緒にさせてもらえませんか？」って行くんです。そして、一緒に楽しくグランドゴルフをやった後に「避難訓練参加してくれましたか？」って聞くんです。そしたら、「いや、俺は参加せんかったわ」って言われるんです。そしたら、子どもたちが「じゃあ今年は一緒に参加してくださいね」って言うんです。防災活動なんですけど、楽しんでその後で一言言うんです。保育園の訪問も、結構どこの学校でもしてると思うんですけど、訪問するときに、防災に関係するような、踊りを作っていって、一緒に踊るんですね。保育園の人たちは皆で避難訓練に参加してくれるんですけど、園児に「お父さんとかお母さんとか、参加してくれたかな？」と聞いたら、「ううん」って言いますよね。お父さんとかお母さんとか来てない人も多いんです。「じゃあ、今度するときはお父さんとお母さんも連れてきてくれるかな？」って言ったら、皆「わー」ってなる。今自分たちの地域の中でどんなことをしたら、地域の人たちが喜んでくれるのかを考えて行動する。その結果、中学生が行って喜んでくれると、今度は地域の人たちが「中学生のために」って気持ちを持ってくれるというのをすごく実感しています。地域のことを題材にした劇を文化祭に作りました。そうすると見たことないようなお年寄りの人たちがたくさんきてくれるんですよ。台本は、詳しくそんな地域の人をお願いして、協力してもらって、一緒に作りました。それから衣装も地域の人たちが準備してくれて、道具も「こんなあるよ」と言って準備してくれる。それで新しいお年寄りと仲良くなる。すると、またその人たちも避難訓練に参加して下さる。避難訓練に参加して下さると、その中で当然いろんな活動していますので、今までに訓練に参加して下さらなかった、防災についてはあんまりっていう人たちも、その中で一緒に地域ひとつになって活動ができる。このように1年1年、少しずつどうすれば参加してもらえるかな、地域の人たちが喜んでくれるかなっていうのを子どもたち一緒に考えながらやってる、っていうのが、小木中学校の活動なんです。



小川 正先生



廣澤 孝俊先生

片田 「地域が協力してくれない」と文句を言うというか、そこに問題を見つけるのではなく、子どもたちが出張って行って、そして向こうが勝手に変わっていくってことですよね。日本でも指折りの有名な野中郁次郎先生っていう経営学者が僕のところに尋ねてきまして、僕にこういうことをおっしゃったわけです。「企業のイノベーションを僕はやっている」、「これ簡単だ」、「なぜならば、企業の若いやつらや企業体質を変えるには、アメとムチという武器がある」と。会社の方針を聞くやつには、給料、報酬をあげてやればいいわけです。言うこと聞かんやつは、給料下げてやればいいわけです。「でも、片田、お前がやっている防災は、社会とのコミュニケーションだ」と。例えば、僕と子どもたちの間、先生たちと子どもたちの間、僕と地域の人たちの間にはアメもムチもないわけです。でも変わってもらわないといけない。もしここで相手が変わるのならば、そこにあるのは“共感”だけなんです。共感を持つことで初めて相手は変わるわけですね。今の小木の話を見ると、子どもたちは、地域の人たちに避難訓練に参加してもらおう、彼らに変わってもらおうと思って、まず何をやったかという、共感を生むコミュニケーションをやってるんですよ。相手を批判するんじゃなくて、「出て来い」と言うんじゃなくて、向こうの非を指摘するんじゃなくて、自分たちが出て行って、まずは一緒にグラウンドゴルフをやって楽しむ。おそらく、おじいちゃん、おばあちゃんは初めは面食らったと思うんですよ。中学生が突然やってきて、「まぜてくれ」と言われて。拒む理由もないし、最初は戸惑いながらも、とりあえず一緒にやってみたら、案外楽しそうにやってくれるなど。このように関係性ができた上で、「来てよ」と誘うので「分かった、行く」と返事してもらえる。先ほど、全部イエス、イエス、イエスというコミュニケーションをしていくべきだ、肯定的にコミュニケーションをしていくべきだと申し上げたんですけども、まさにそうですよね。「グラウンドゴルフなんて、年寄りくさい」と思ってたけど、「やってみると結構楽しいよね」と理解を示してくれた中学生に対して、共感がうまれた。その上で、子どもたちが考えている避難訓練に「出てきてよ」って誘う。じいちゃん、ばあちゃんは子どもたちが自分たちの命のことを考えていてくれることに気づく。全部正のループじゃないですか。このようにお互いを思いやっていていく中で、共感が生まれると思うし、相手の行動の変化が起こると思うんですね。やらない人を批判するのではなくて、いつもその人なりの理由があるということを理解してやった上で、常に肯定のコミュニケーションを考えるとと思うんですね。僕は、小木の中学生たちは見事にそれをやってくれていると思うし、小川先生、大句先生、廣澤先生、皆さんがご指導してくださってるんじゃないかと思うんですね。新庄地区も、子どもたちの動きを地域の人たちが喜んでいて思うんです。おそらく本当に新庄の誇りなんだろうと思うんですよ。それが2億円の寄付なんですよ。

そういう観点からですね、地域に入っていく戦略っていうものも、「戦略」なんて言い始めた時点で下心があるみたいでダメですよ。子どもたちを地域に行かせて、地域が自分たちをすごく肯定的に前向きに、喜びを持って迎えてくれる、という実感を子どもたちに1回与えることがスタートなんじゃないかなって気がするんです。

奈良 その通りだと思います。コミュニケーションで、防災教育で、共感というのは、また大事なキーワードです。共感を呼ぶリスクコミュニケーションは、そのメカニズムは片田先生がおっしゃってた通りですし、その根底には、私が先ほど申し上げた価値観の共有、何を大事とと思っているかということ、相手の立場に立って、しようとする努力あるんだと思います。

金井 この連携の話から議論させていただいたのは、いろいろ方のお話を聞いてると、コミュニケーション力と、地域との連携は、セットで考えてもらった方がよいのではないかと感じたんです。先ほど片田先生も戦略を考えるっていう話をされましたけど、企画というか、仕掛けをどう作るかだと思うんですね。最初のきっかけを、すべて子どもたち側に置いてあげる。子どもたちが地域のことを学習するなかで、自分の地域で今足りないことに気づく。それを解決する方法を考え、実践する。この実践する段階で必要なところと連携する。いつでも最初のきっかけを子どもたち側に置いて、何かやんなきゃいけないから、とりあえず小中学校合同避難訓練って始めるんじゃないかと、中学生が自分たちの地域のことを考えて、その結果として、一人で逃げられない小さい子がいること気づく。「一緒に逃げてあげなきゃ」、「でも、いきなりは一緒に逃げられないだろうから、まずは一緒に訓練しよう」というように、子どもたち発案でできたものにあわせていくという“仕掛け”が重要なんじゃないかなと。

先ほど、森本先生にお話いただきましたが、安否札もそうでしたよね。最初に考えたのが、生徒会発案で、何か地域の人のために出来ることないかということで、「避難したかどうか、どこに避難したのかがわかるように、安否札を作って、配布する」ことになりました。全校生徒が手書きで、3000枚の安否札を作りました。それを生徒が配りに行くわけですが、受け取る側のおじいちゃん、おばあちゃんは嬉しそうな顔をしていました。人前で喋るのが苦手な女の子が、最初は先輩に背中を押されて、しどろもどろで説明していたのが、何件も配って回るうちに、だんだん上手く話せるようになっていました。先生方が教え込まずに、きっかけを与えることで、子どもたちに勝手に育ってもらう仕掛けがうまくいった事例かなと思います。こういう授業の企画ができるというのも、コミュニケーション力なのかなと感じました。

三浦 釜石中学校の三浦です。2日間、大変素晴らしい発表、実践を学ぶことができ、良かったなと思っています。実は、これだけは絶対言っておかなければいけないなと思うことがあったので、お時間頂きました。私は震災の数ヶ月前に、防災の会議で片田先生に会っていました。そのときに、鶴住居小学校から提案された地図の中に、鶴住居防災センターが一次避難所かなにかで指定されていました。会議の後に「こんな海拔高度のないところで大丈夫なのか」と担当の先生に言った覚えがあるんです。鶴住居防災センターは避難所ではないんですけども、普段避難訓練でお年寄りが避難する場所として使っていました。そして震災当日、東中学校と鶴住居小学校の子どもたちは学校にいたから、そちらには行かなかったんですけども、お年寄りがそこにいっぱい集まって亡くなってしまいました。だから、数ヶ月前に私は気づいてたんです、そのことに、何か気づいたことを言わないでいるのは、すごく後悔することになる。行政に「ここヤバイんじゃないんですか」とか「一次避難所でもいいんですか」って言ったから、どうなったかは分からないけど、それと同じ事を今回感じたんで、言わせてください。

新庄小学校、中学校は避難所に指定されているんですか。

谷本 小学校も中学校まであがってきます。

三浦 私は上空写真を見たときに、浮島のように見えました。まさに津波は北から南から、その避難所を囲むように押し寄せてきて、おそらく東側で合流するんだろうなと。で、一番怖いのは実は震災のときに火災が発生したことです。昭和21年の津波のときには、どうだったかはわかりませんが、皆さん知っての通り、大槌はその後の火災で丸焼けになりました。昔と比べて発火性の物は、かなり多くなってるはずなんです。浮島の山の麓に火がついたら、どうなる

んだらうなって。すごく立派な取り組みをやっている子どもたちですよ。その命を本当に守れるかなって、すごく不安に感じたところです。

消防は海から離れたところに移転していくんでしょうか？釜石は被災後、移転しました。警察も移転しました。警察は海べたにあったので何もできませんでした。消防もみんな津波にのまれて、消防士も何も動かなかったですよ。



三浦 誠先生

子どもたちはそうやって地域と一緒にして、一緒に取り組もうとしている。でも、その子どもたちの命をしっかりと守れるような市の体制っていうのは整ってるのかなっていう。そこはすごく心配になりました。おそらく、学校の近くには消火栓かなんかもあると思うんです。釜石では、私が避難した高台の足元に火がつかしました。消防団が、ぱっと動いて放水して、消火したんですが、消防団がいないときは、どうすればいいんでしょうかね。私たちが消火栓を動かすことができるんでしょうか。分からないです。やっぱり、そういったことっていうのも一緒に考えて、働きかけていかないと、起きてからでは遅いんではないかと思いました。

片田 今のお話なんですけども、おっしゃる通りなんです。でも、それはレベルがかなり高度な気づきだと思います。だから、まずは子どもたちがやるようになって、地域を巻き込んで、地域でこういう議論がちゃんとできるようになって、本当にここの避難所で大丈夫なのかっていう議論に火がついていくことを求めたいわけですよ。でも、おっしゃる通りで、周りが全部津波に浸かって、島のような。そして、非常に多くの場合、火がついて、焼けあがってくる。それを心配されています。これは、防災担当者会議で言うべきような話になるんですけど、避難場所は、「ここまで来て、これでよし」、「もうこれ以上の安全はない」という限界がある所よりも、「ここまで来たら更にここ」、「更にここまで来たら次はここ」、「こっちで火がついたらこっちに行ける」という二度逃げできる所というのがベターです。出来る限り、今回の教訓に基づくんならば、そういうことになります、でも、この問題は、単に恐れているだけじゃなくって、本当に地域全体が津波防災に対して、具体的にどうしたらいいのかって考え始めたときに、多分出てくる話題になるんです。そのレベルまでに行ったときに、防災としての実効性っていうのが出てくるように思いますよね。

鵜住居防災センターは、最初おっしゃる通りでした。でも、防災に説教して、あそこは津波の避難所からは除外してもらったんですよ。一応それを通達もしてあったんですよ。しかしそれが不徹底の状況の中で、ちょっと前に、あそこで避難訓練をやってしまった。いろんな不整合の中にああいうことが起こってしまった。後悔しています。後悔していますが、そういう問題も全部含めて、僕らがその日、その時までにはやらなければいけないこと、やっておけばよかったって思えることって、まだまだいっぱい出てきます。新庄の話も一つの事例です。そういうことに気がが、あれやこれや出てくるし、各地の、各地で起こった事例に学んで、それを一つ一つ反映していくということが、この地域の防災を高めていくということです。今の三浦先生のご指摘も、そういう項目の一つになってくるわけですね。そういう議論が、前向きに、どんどん積み重ねられるような地域に持って行くこと、地域との連携が出来るようになっていくことこそが、重要で、そういう地域に皆でしていきたいと思いますよね。

三浦 実際到大槌では、山に火がついて、北に逃げれば北から火がつき、南に逃げればまた南に火がつき、一晩中逃げ惑ったってという話を聞いています。山に火がつくことは本当にあるので、覚えていて欲しいなと思います。

大川 今日、本当にいろいろな話を聞かせていただいて、自分自身の今までの姿勢をもう一度取り直し、あかんって気持ちでいます。それと、林先生もおっしゃっていましたが、自分自身も幼い頃の経験があります。実は、僕も山崩れ、山津波で友達亡くしました。それで、僕はもう、雨の多い尾鷲に住みたくないって思いをずっと持ってたんです。今でも、雨が怖くて、夜雨、大雨が降ると寝られないんです。家族は平気で寝てるんですけども。その思いが僕はあって、尾鷲に住む以上は、急斜面の所は山が崩れてくるんやってことを忘れずにいます。だから今まで、僕がそれぞれのクラスに入って、自分の体験談を子供たちにずっと話してきたんです。だから、災害によって人が亡くなるんやっていうことは、身近に感じています。

今尾鷲市で中心になって、やって頂いている方っていうのは、やっぱり今日も話に出ましたが、現地を見て、話を聞いて、そして自分のものとして、帰ってきた先生方なんです。熱意をという話をされてましたので、やっぱり僕は一緒にそういう経験とか、一緒に考えるっていう、時間を取るしかないかなって思います。自分自身、実はこの4月から教頭っていう、管理職の立場になってしましまして、やっぱり今おる若い先生方に、頭ごなしにこれやれ、あれやれって言うの、全く問題外だなんていうのは思ってます。やっぱり、一緒になって何ができるかっていうのを考えて、また来週から先生方に今日の話は是非伝えて、一緒になって、うちの学校の防災教育というのをもう1回見直していきたいなって思いました。

松井 私は初めて参加させてもらいましたが、素晴らしいなって思って聞かせていただきました。熱をたくさん頂いたなというような印象であります。私は、昨日もちょっと話しましたが、中越地震と中越沖地震と2回、自分の学校が被災しています。管理職という立場だったもんですから、安全教育というよりは安全管理ということで、「自分のところで、下手起こさないぞ」という気持ちで、どんな準備をして、どんなことをしていけばいいか、そういう大きな文脈のなかで、じゃあ子供にどんなふうな教育をしていけばいいかと、そういう風な所から見えました。これまでも防災教育の大きな可能性を私なりに感じてきたところはあるんですが、昨日今日と、先生方のお話を聞いて、改めて強く感じさせていただきました。防災教育は人づくり、人づくりは街づくり、とつながっていくと思います。具体的な数字を出して考えていくと



大川 太先生



松井 謙太先生



松本 潤先生

私どものような地方は、厳しいことが結構あります。そのなかでも、子どもたちは未来の希望の星でありますので、この子どもたちへの未来、それにこの防災教育が大きな働きをしてくれるという、そういう期待感を高めた二日間でした。

松本 昨年度まで教育委員会に7年間勤めていて、片田先生にご指導いただいて、防災教育を担当していました。今年度から現場に戻りました。私が教育委員会の担当者だったとき、緑ヶ丘中学校は、ちょっと歯がゆかったんですね。防災教育に対しての気持ちがちょっと感じられなかったんです。ところが、昨年度から現在の校長が赴任すると、ガラッと変わりました。校長は前任校で、水害で生徒を3人亡くしているっていうことがあって、ガラッと変わりました。今年度からそこに赴任させていただいたのですが、先生方の意識がすごく高いです。防災のことは、自発的にやってもらっています。実は9月4日は、3.11の半年後に起きた紀伊半島大水害です。この大水害が4年前に起こりました。その日に防災集会を必ず開こうと校長が言ってまして、「お前はここで昨日今日聞いてきたことをそのときに話しなさい」と言われました。どうしようかなと思ったんですけども、これによって継続していくことも、あると思っています。防災教育に限らず、現場には、やらされ感とかっていうのが、出たりするときもあります。皆で一緒にやってみようっていう気持ちを持って、やっていきたいなと僕は考えています。本当に貴重なお時間を頂けた二日間でした。改めて自分が何をすべきなのかっていうことを考えさせられた二日間でした。

片田 二日間、本当にどうもありがとうございました。今回は、ディスカッションの時間をたくさん取りました。皆さんのお話を聞いて、変わってきたな、広がりつつあるなっていう実感を持っています。しかし、今日この場に来ておられる方は、やっぱり限定的な方々なんですよ。それぞれの学校に帰られて、広めて頂きたいと思ったり、それぞれの地域に帰って、地域で広げて頂きたいと思ったり。また、学校間の連携もどんどん広がっていいなと思っています。そして、我々に関係なく、先生方の間に、それぞれの間にこのコミュニケーションができていくということを本当に嬉しく思っています。ここで顔見知りになった者同士で、「あー、あそこの学校いい取り組みやってたな」「あれについてちょっと教えてもらおう」なんてのは、気軽にそれぞれで情報交換しあってください。これも皆さんにこの会議に参加して頂いているメリットだと思いますので、どうか、それぞれで連絡を取り合ってください。

いずれにしても、こういう動きのなかで少しずつ日本の防災教育が変わっていくということと、もっと大風呂敷広げて言うならば、日本の教育が変わっていくっていう形になっていくといいなと正直思っています。これまでの教育と何か違うものを感じつつ、まだそれを明文化できないようなモヤモヤとした状況だと思います。しかし、「何かありそうだ」という気付きを持った集団ですので、それぞれの実践の中で新たに気付かれたことを、次の黒潮町に持ち寄っていただきたいと思ったり。そして、「あれからこんなことやってみた」、「こういうことができた」、「こういう側面もある」、また「こうやってしくじった」とかでもよいので、皆さんとの共通知をさらに高めていけるといいなと思っています。

二日間ありがとうございました。以上をもって閉会したいと思います。